**政治思想基礎　第十講　逆説の近代　＆　現代思想の源流（１）　マルクス**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法学部　萩原能久

http://www.law.keio.ac.jp/~hagiwara/　　　　　　　　　　　　　　　　　　hagiwara@law.keio.ac.jp

**Ⅰ 近代への転換の一般的契機**

経済的：産業革命　→「合理性」、「進歩」

政治的：市民革命 →「人民主権」、「民主主義」

→民主主義の問題があった

→人民主権

→政治のもの

→思想的革命

→科学革命、政治学の科学化

→ルネサンス→個人の良心の問題

→デカルトの哲学問題

思想的：ルネサンス、宗教改革、科学革命 →「個人主義」「主体」が有する「理性」「を支える客観性」

　　　　　　　 「世界の＿＿＿＿＿魔術からの解放＿＿＿＿」Entzauberung der Welt

世界の魔術から解放するもの

→後ほど、啓蒙の弁証法

→魔術への転換

→啓蒙の弁証法

Modus(尺度) + erunus (時を表す)

→5世紀末にキリスト教支配下の現在のローマと異教が支配した過去とを対比させるものとして成立「昨日までとは違う現在」の意識

→どういう風に変わったのか

**ハーバーマスの「文化的モデルネ」論**

　近代以前における宗教的・形而上学的世界像に表現されていた実体的理性の分化

・真理 　　　　科学(学問）　認識的・道具的

・規範的正当性　　道徳　　　　道徳的・実践的

・純粋性・美　　　芸術　　　　美的・表現的

　　真・善・美という三領域の自律性（相互関与の排除）これが混在していた

→実体的理性

→三つに分化する領域

→美という領域

→それぞれ独立

→この3つの領域

→言語を用いて行わなければいけない

→科学や学問

→専門家や心理を扱うもの

→美的表現的なもの

→認識の問題

→正義に関する問題

→科学と道徳と芸術

→3つの領域が分化してきたのが特色

→お互いに関連を持つことを避けている

→ネガティブな側面が必要

→学問システムが分化した結果

→政治の専門家の間にはっきりとした乖離がある

→経済システムが乖離

　　専門家vs.素人　　例：「学生の授業評価」、「行政国家」

→一般人の生活意識を持たない人たちが法を作ってしまっているという背景がある

→何もわかっていない素人には評価して欲しくない

　　ブラックボックス化した科学　→　ex.コンピュータ

* ハーバーマスの問題意識：この文化的近代の合理化が、逆に生活世界の貧困化をまねく

というパラドックス

→生活経験と学問を実生活の中で結びつけていく

→それにより、パラドックスを解消していく

→レオナルド・ダヴィンチ

近代というパラドックス

確実性のありえぬところに確実性を求め、異なる生活様式を容認はできても、それを正当化できず、自己の立場からその正しさの根拠を示しえない。また物質的・技術的「進歩」を享受しつつ、事実からはいかなる価値も政策も引き出すことが禁じられているので実践的に無力である。

→イスラム国ではどうやって示すことができるのか

→事実問題からどうやってやるのか

→近代のパラドックス

→5つぐらいのもの

**Ⅱ 近代のパラドックス**

1). 統一的世界像の解体と自然科学的世界像の成立

　　　　→存在と当為、科学と道徳の分化

＊自分で判断する必要がなくて楽だった

→自然科学的世界像

→心理の道徳の問題

2) 主体・客体認識構図の成立

→ sub specie aeternitatis ：永遠の相のもとで

→永遠の相の下に立つ

→認識主体の反省能力が必要

→神の視点

→時間の相を超越したもの

→宇宙を貫く法則性を持つ

→完全な普遍性を達成しようとする

→近代科学はObjectivismを達成しようとする

→自明なもの

→明晰判明なもの

→私にとっての心理と他人にとっての心理が違うものになってしまう

→認識論的危機

→研究対象と自分の間に二重性のパラドックスがある

→ideologyの時代

→自分だけが社会のアルキメデスの時代

→心理が唯一正しいもの

→アメリカの科学の哲学者

道徳において相対主義

1.Objectivism…認識の「アルキメデスの点」、あるいは神の玉座

2.Subjectivism

3.Absolutism

4.Relativism

客観主義と相対主義（これのみが現代において唯一、理論的に容認されうる選択肢）は、それぞれ容認されえない選択肢としての主観主義と絶対主義をとりこんでいる。　　…R.Bernstein,『科学、解釈学、実践』

→主体客体

→自分自身の対立ぶつ

→主観主義、相対主義

３) 人間中心主義

存在と当為（科学と道徳）、主体と客体の分離

科学の人間中心主義（認識プロセスへの観察者の参与）と人間中心主義の破壊unreliability of human thought

　　→科学の進歩と非科学の隆盛

　　→科学による「世界の魔術化」と哲学の秘教化

＊人間の思考を排除しなければならない

→人間の意見なんか取り込んではいけない

→非合理的な非科学の優勢を迎える↓

4) 世界の脱魔術化と再魔術化

近代化・合理化と意味の喪失・自由の喪失

→素人が何かをやってもマジでわからない状態

→機械のように動くからだとしての自分が演じる他者との関わり。これを科学的観察者のように突き放して冷ややかに見ているもう一人の自分

→役割ともう一人の自分の区別をつけられない人間は現代社会では生きられない

5) 正当化主義、基礎づけ主義

正当化主義の帰結＝ミュンヒハウゼンのトリレンマ…ハンス・アルバート『批判的理性論考』

1. 無限遡及 　　　　　2. 循環論法　　　　　3. 恣意的作業中断

→無限遡及

→Yが正しいのはなぜだろうか

→無限遡及をもたらしてしまう

→循環論法

→デカルトの議論

→神のことばが正しいのはなぜだろうか

→論理的には誰も受け入れることができることができない

→根拠の追求ができないということ

→正しさの追求をしていくとトリレンマが起きる

→政治学的な意義について考えている

**Ⅲ 現代思想の源流（１）　カール・マルクス**

**マルクス思想の三つの源泉**　(レーニン）

　　1)イギリスの政治経済学

　　2)フランス啓蒙哲学の社会主義思想



　　3)ドイツ観念論哲学

**マルクスの歴史・経済理論：**「史的唯物論」

生産手段　 ┐

　　　　　 │土台　→　上部構造

生産諸関係 ┘

社会の現実的基盤たる経済構造（土台）によって規定された法律、道徳、宗教、芸術、哲学などの社会的意識形態（上部構造）

人間は社会的生産において、一定の発展段階に相応する生産諸関係にはいる。これら生産諸関係と生産手段の総体が社会の経済構造を形成する。これが土台となり、その上に法的・政治的上部構造がそびえたつ。そしてこれに対応するのが社会的意識形態（イデオロギー）である。＊上記の図がそれである。

『ドイツ・イデオロギー』

　１）人間の物質的生存　 ┐

　２）欲求充足と欲求産出 │

　３）社会関係の形成 　 ├→「意識」の形成

　４）生産…人間と自然 │

　　　 　…人間と人間　 ┘

　　分業による

　　　┃　肉体労働と精神労働の分化

　　　┃　労働と生産物の不平等な分配（所有）

　　　┃　特殊利害と普遍的利害の対立

　　　┃ 　疎外の発生　　　　└→共同幻想としての国家

　　　▼

　イデオロギーの成立

＊人間は生産活動を行なっていく

→物々交換を行なっていく

→くさることが内容に等価価値をもたらす

→貨幣を売ったり、買ったりをしていく

→様々な道徳意識をやっていく

→なされるようになっていく

→分業という諸悪の根源を行なっていく

ブルジョア人を搾取→国家を登場

→alienationが生じてく

→労働者は疎外を行なっていく

→ideologyの成立が行われていく

→分極化が生じる→社会革命

→諸関係と矛盾

→急激に革命が生じる

→革命の理論

→資本主義→階級分解

→ブルジョワ人　→　自らの労働力を売りにする

→プロレタリアートからの労働力を持っていく

**社会革命の思想**

社会の物質的生産諸力は、発展のある段階で、既存の生産諸関係、あるいはその法的表現たる所有（財産）諸関係と矛盾するようになる。そのとき、革命の芽が生じる。こうした経済的土台の変化とともに巨大な上部構造も、徐々に、ないしは急激にくつがえる。

人類史＝アジア的 → 古代的 → 封建的 → 近代ブルジョワ的生産様式

　　…生産力のそれぞれの発展段階に対応した生産諸関係による類型化

革命の必然性

　資本制の起源：諸個人からの生産手段の略奪　　資本制の現状：生産諸関係と生産諸力の矛盾の増大

　→絶対的「窮乏化」理論　→　社会革命

→

**マルクス主義の論争点**

1. 土台—上部構造関係

→本来は一方通行、生活様式が思想を形成する

→思想は決定しない

→上部構造は規定しない

→マルクス批判が当然成り立つ

→自分自身に成り立つ

1. 共産主義社会の位置付け

→マルクスの資本主義社会の問題を規定している

→実生活の基盤の上にやること

→通人(通な人 )に実生活の上で鍛えてあげていく

→人間の支配の完全な発展

→一方で自然支配とエコロジーの問題がある

→

1. 「疎外」の克服？
2. 類的存在としての人間からの疎外
3. 対象化 = 労働からの疎外
4. 自己からの疎外
5. 自然からの疎外
6. 商品－貨幣論

→貨幣とはブツブツ交換のことをいう

→貨幣を蓄えようとする人々

→自然的な発展の諸段階

→海の苦しみを短くしている

1. 革命の客観的条件と人間の主体性

→自然法則を探り出したとしても、その社会は自然的な発展の諸段階を飛び越えることも、法令で取り除くこともできない　→　しかし、その社会は産みの苦しみを短くし、和らげることはできる

→革命主体としての、と現実のプロレタリアート

→解決策としての「前衛党理論」= 共産党一党独裁

→深の利益の代弁者

→前衛政党

→労働者の利益を代弁している者

→歴史的使命

→そういう問題

→資本主義国家の福祉国家化

→革命の方向

→労働者

→マルクスの「自己破壊的予言」か、後期資本主義の構造転換か

→マルクスの予言が外れてしまった

→資本主義国家の福祉国家化の怪獣が起こった

→宗教が人民のもの

→マルクス主義の主張を理解するために

→キリスト教のエホヴァ

→聖書の中で、教会と呼ばれているもの

1. プロレタリアートの「懐柔」化？
2. マルクス主義＝代替宗教？
3. 「弁証法」：論理学か詭弁か？

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*参考文献\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

ユルゲン・ハーバーマス『近代─未完のプロジェクト』、岩波現代文庫

リチャード・バーンスタイン『科学、解釈学、実践─客観主義と相対主義を越えて』Ⅰ、Ⅱ、岩波SELECTION21

Bernard Susser, The Grammar of Modern Ideology, Routledge, 1988

テリー・イーグルトン『イデオロギーとは何か』、平凡社ライブラリー

ハンス・アルバート『批判的理性論考』、お茶の水書房

# カール・マルクス『ドイツ・イデオロギー　新編輯版』、岩波文庫

# カール・マルクス／フリードリッヒ・エンゲルス『共産党宣言』、岩波文庫

# カール・マルクス『資本論』1〜4、世界の大思想11、河出書房新社

# フリードリッヒ・エンゲルス『空想より科学へ』、岩波文庫

ウラジミール・レーニン『国家と革命』